



Title	イタリアにおける近現代史研究の過去と現在 (1)
Author(s)	北原, 敦
Citation	西洋史論集, 4, 112-128
Issue Date	2001-03-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37437
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_112-128.pdf



イタリアにおける近現代史研究の過去と現在（一）

北 原 敦

はじめに

私がイタリア近現代史の研究を始めたのは一九五九年、大学三年生の時である。イタリア史に関して日本では森田鉄郎、星野秀利、清水廣一郎氏らが中世史の研究を進めていたが、近現代史の分野の研究はほとんどないといういい状態だった。その頃の日本における西洋史研究は、歴史の発展段階を一国ごとに類型的に考察する方法がまだ盛んな時期で、二宮宏之氏が「戦後歴史学」を振り返って批判的に言及したように「比較史の視点から……段階論と類型論が接合され……封建制から資本制への移行の過程におけるイギリス型、フランス型、プロイセン型、特殊日本型など」^①に関心が向けられ、それぞれの型の解明に力が注がれていた。しかしまたこの頃には、一七世紀のイギリス革命、一八世紀のフランス革命、一九世紀の明治維新をそれが起こった時代を無視して比較する方法への反省も生じており、フランス革命や明治維新を同時代の国際的環境のもとで検討する世界史の同時代的

考察の必要が主張され始めていた。

私のイタリア近現代史の研究は、西洋史研究のこのような動向の中で、ではイタリアの場合はどうかという素朴な問いから発しており、研究テーマはごく自然に、明治維新とほぼ同時期にイタリアの統一をもたらしたリソルジメントに向けられた。これ以前から個人的には、イタリアのネオレアリズモ映画やレジスタンス文学に関心があって、リソルジメントの研究とあわせてレジスタンスの研究も始めた。レジスタンスについては、レジスタンスの歴史そのものと同時に、レジスタンスを経験することから生まれた戦後イタリアの思想と文化の動向への関心が含まれていた。

私のイタリア近現代史研究の出発点はこうしたところにあるが、実際に研究を始めると、今度はイタリアにおける歴史学のあり方という問題に直面せざるを得なくなる。第二次大戦後の日本の歴史研究が「戦後歴史学」という特有のあり方をとったのに対して、イタリアではファシズムの支配とそれからの解放がこの国の歴史学に固有の問題

を課しており、当然のことながらイタリア史研究を進めるに当たってイタリアにおける歴史学のあり方を理解することが不可欠であった。この小文の意図は、当時から現在に至るまでの研究過程で私の感じ取ったイタリアの歴史家たちの歴史意識と研究方法を紹介しながら、イタリアの歴史学の特徴について考えることにある。

私がイタリア史研究を始めた一九六〇年前後は、リソルジメントもレジスタンスもイタリアでは活発な論議の対象となっていた。リソルジメントに関しては、アントニオ・グラムシ(一八九一—一九三七)の『獄中ノート』に触発された解釈にたつ研究者とそれを批判する研究者の間で論争が交わされており、リソルジメント研究への新しい息吹が感じられる状況だった。レジスタンスに関しても、丁度この頃、レジスタンスを担った活動家・政治家・研究者たちによる公開講座がイタリア各地で開かれ、その記録が出版されたり、またレジスタンスを第二のリソルジメントとみて両者の関係を論ずる議論も多かった。^③レジスタンスがその打倒を目指したファシズムについては、否定すべき対象としての論議が先行して研究といえるものは少なく、むしろリソルジメントから生じた自由主義国家が、なぜファシズムを生み出したかという問いから、ファシズムの起源をめぐる研究が行われていた。それから四〇年を経た現在の研究状況は、当然のことに大きく変わった。リソルジメントに関しては、研究者が課題意識を喪失したかのごとく、かつてのイタリア近現代史研究の中心テーマとしての位置を失い、研究はめっきり減ってしまった。しかし他方で、リソルジメントを統一国家の形成という脈絡でなしに、ソシアビリテ論を取り入れて

のアソシアシオンや政治化の過程をそこにみる研究など、一九世紀イタリア史の新しい捉え方の試みがでてきた。^④

この間に、リソルジメントに代わって中心テーマとなったのはファシズムである。一九七〇年代以降、ファシズム研究は急速に深まりを見せたが、同時に論争が生じた。論争の焦点となったのは、後述するレンツォ・デ・フェリーチエの研究方法をめぐる問題だった。彼は公文書と私文書双方の史料収集を熱心に行って、長大なムッソリーニ伝の執筆をはじめファシズム研究を精力的に進め、ファシズムの抑圧の面だけでなしに同意の契機を重視するなどさまざまな問題を提起した。しかし、その史料操作の方法と、研究の客観性を強調する一方で政治性を伴ったファシズム解釈に疑問が出され、種々の批判を招いた。

ファシズムに関するもうひとつの論争はファシズム文化をめぐるなされた。ファシズムに文化は無かったとするベネデット・クローチェ(一八六六—一九五二)のテーゼが思想界で長く支配的だったが、ファシズムによる同意の組織化に関連して、知識人を動員しての百科事典の刊行や民衆の労働余暇活動(ドーポラボーロ)あるいはファシズム期の建築、映画、スポーツなど諸分野の研究が進められ、それらをファシズム文化と呼ぶかどうかをふくめて、ファシズム文化の性格と特徴をめぐる議論が活発になされた。

ファシズム研究と並んでレジスタンスの研究も、この四〇年間に深まり、取り上げる題材や方法が多様化した。ここ数年は、レジスタンスが最も論争的なテーマをなした感があるが、それには複数の論争がからんでいる。一つは、レジスタンスをドイツ占領軍および復活した

ファシズム政権に対する抵抗運動としてよりも、イタリア国民の内戦としての性格を強調するパヴォーネの大著『内戦―レジスタンスの道徳性に関する史的考察』^(c)をめぐる論争である。もう一つは、レジスタンスから生まれたとされてきた戦後の共和制(第一共和制)が九〇年代に崩壊する事件があり、この衝撃のもとに共和制を生み出した原点に戻ってレジスタンスの意味を問い直すとする論争である。この二つの問題は、折からのヨーロッパ統合の進展と地域主義の台頭の間に挟まったネーションの危機意識と重なり合って、レジスタンスはファシズムを否定した後にどのようなネーションのアイデンティティを創出したのか、あるいはむしろネーションの解体ではなかったのかとする激しい議論を呼んだ^(d)。

リソルジメント、ファシズム、レジスタンスという大きなテーマへの関心の移り変わりとともに、研究方法においても新たな探求があり、七〇年代には国際的な研究動向と軌を一にして社会史的方法への関心が強められて、その中からミクロストーリーのようなイタリア歴史学に特有の方法も提起された。これらの個別的な検討は第二部で行い、その前に第一部として、この四〇年間に幾つかの歴史雑誌が創刊され、それぞれが一定の性格をもって研究動向を作り出しているのです、まずその紹介から始める。

註

(1) 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」、歴史学研究会編『戦後歴史学再考』青木書店、二〇〇〇、一二六頁

(2) AA.VV., *Lezioni sull'antifascismo*, Bari, 1960; AA.VV., *Trent'anni*

di storia italiana, Torino, 1961; AA.VV., *Fascismo e antifascismo: Lezioni e testimonianze*, 2 voll., Milano, 1962

(c) AA.VV., *Il secondo Risorgimento*, Roma, 1955; Claudio Pavone, *Le idee della Resistenza. Antifascisti e fascisti di fronte alla tradizione del Risorgimento*, in *Passato e Presente*, N.7, 1959, pp.850-918

(4) リソルジメントについては第二部で検討するが、イギリス人研究者による近年の研究動向の明快な整理として、Lucy Riall, *The Italian Risorgimento: State, society and national unification*, London & New York, 1994。また、最近の研究動向を取り入れたフランス人研究者による概説書として Gilles Pécout, *Naissance de l'Italie contemporaine (1770-1922)*, Paris, 1997

(5) Claudio Pavone, *Una guerra civile: Saggio storico sulla moralità nella Resistenza*, Torino, 1991

(6) ネーミンの解体論として Renzo De Felice, *Rosso e Nero*, Milano, 1995; Ernesto Galli della Loggia, *La morte della patria*, Bari, 1996。解体論に対する批判は次節註(5)の他、『現代イタリア』Italia Contemporanea 各号の諸論文を参照。その他 Gian Enrico Rusconi, *Se cessiamo di essere una nazione*, Bologna, 1993; Id., *Resistenza e postfascismo*, Bologna, 1995

第一部 歴史研究誌にみるイタリア歴史学

【一】『イタリア史学雑誌』とヴェントゥーリ

イタリアの歴史研究の代表的な学術雑誌には『イタリア史学雑誌』*Rivista Storica Italiana* (一八八四年創刊)、『新史学雑誌』*Nuova Rivista Storica* (一九一七年創刊)、『リソルジメント史評論』*Rassegna Storica del Risorgimento* (一九〇八年創刊)の

italiano が一九一四年に改題) などがあった。『イタリア史学雑誌』は最も伝統的な雑誌で、政治史・思想史を中心とした実証的な手堅い内容であり、『新史学雑誌』はもともと経済・法制史学派を継承して社会経済史的な論文を盛り込んでいたが、次第に独自の特徴は消えさり、『リソルジメント評論』は表題通りリソルジメントの専門誌ということで、一九六〇年頃はそれぞれあまり問題提起的とはいえなかった。

『イタリア史学雑誌』は一九五九年に、病気の悪化したフェデリコ・シャボー(一九〇一—一六〇)からフランコ・ヴェントゥーリ(一九一四—一九四)に編集長が交代して、誌面に新企画が導入されていた。^①当時そのことには気づかなかったが、雑誌の伝統的な性格はヴェントゥーリのもとでも維持されていた。

シャボーはクローチエと親密なリベラルな歴史家で、クローチエが自分の蔵書を開放して創設した『イタリア歴史研究所』の所長も務め、一九五二年、クローチエが没したとき、「歴史家クローチエ」と題する秀逸なクローチエ論を発表した。^②近世史を専門としていたが、近現代史の分野でも『一八七〇—一八九六年のイタリア外交政策史』と『現代イタリア・一九一八—一九四八』の二著を残している。^③前者は外交政策史というタイトルが付けられているが、統一後のイタリアの政治と思想を独自の手法で考察した内容で、この時期のイタリア史を理解する上で現在でも必読の名著である。後者は、一九五〇年のパリ大学政治研究所における集中講義のイタリア語版で、ファシズムからレジスタンスを経て共和制の成立に至る歴史をバランスよく語ってお

り、これも研究の手引きとしての価値をなお保っている。

ヴェントゥーリは、トリノ大学の美術史教授だった父リオネッロがファシズムへの宣誓を拒否して大学を辞めた直後の一九三二年に、一家でパリに亡命した。ソルボンヌ大学で一八世紀フランスの啓蒙思想を学びながら、カルロ・ロッセッリを中心とする反ファシズム運動の『正義と自由』に参加し、この組織の機関誌『正義と自由』に政治論文や歴史論文を寄稿した。^④レジスタンスの時期には、出身地のピエモンテ地方で行動党の中心メンバーの一人としてレオ・ヴァリアーニ、ヴィットーリオ・フォア、アレッサンドロ・ガラント・ガッローネ、ノルベルト・ボッピオらと活動を共にした。共産党がレジスタンスを国民解放闘争として国民統一の政策を重視したのに対して、行動党はレジスタンスを内戦として意味づけ、社会の根底からの改革を主張した。^⑤これらの人物は皆、戦後の思想界で活発な発言を続けてイタリアの民主的改革に努めるが、とくに九〇年代に、レジスタンスは国民の分裂と解体をもたらしたとする議論が一部で強まったとき、それぞれ論陣を張って、レジスタンスがファシズムに代わる新たなアイデンティティ創出の運動であったことを主張した。^⑥

ヴェントゥーリは四〇年代末にイタリア大使館付き文化アタッシュとしてモスクワに滞在し、このときの調査に基づく著書『ロシアのナロードニキ』(一九五二)は国際的な注目を浴びた。その後、カリアリ大学、ジェノヴァ大学を経て一九五八年からトリノ大学教授となり、一八世紀啓蒙改革思想に関する多くの著作を発表した。^⑦ヴェントゥーリの研究方法の特徴は、思想の広がりや「影響」でなく「循環」とし

て考察するところにあった。つまり、誰々から影響を受けたとか、どこそこに影響を与えたという言い方でなしに、さまざまな回路を通しての思想の循環ということを考えようとした。この回路は、個人的接触、手紙の交換、読書、出版事情、同一書の異本、私的議論、公開の討論、旅行など多様な形で検討され、そうした形での思想の循環と受容のされ方を問題にした。この方法は、必然的に一個人を広い人間関係の中に導き入れ、また一地域をヨーロッパ規模の空間に結びつけることになる。従ってまた、彼の考察する啓蒙思想は、常に一国史的規模を越えた広がりをもつことになる。ヴェントゥーリが、一九五三年のリソルジメント史研究第三二回大会で「思想の循環」と題する報告を行った中に、この方法の原型がすでに見られた。

ヴェントゥーリはまた、啓蒙思想の中にユートピアと改革の二つの要素を見て、この二つは密接に絡んでいて切り離すことができないことを強調した。そしてここから、思想が現実の改革に結実するに当たっての政治のイニシアティブを重視した。彼の方法は、政治思想史というより思想の政治史といえるもので、この方法は一八世紀イタリア史の研究を強く方向付け、次の世代のジュゼッペ・リクペラーティやルチャーノ・ゲエルチに受け継がれるのである。⁽⁸⁾

『イタリア史学雑誌』編集長としてのヴェントゥーリについて一つだけ触れておくと、七四年秋に来日したとき日本の歴史家とさまざまな機会に懇談し、日本における歴史研究に強い関心を示した。そこで彼は家永三郎、隅谷三喜夫、和田春樹、北原らに原稿を依頼し、それは一九七七年第二号「日本歴史家特集」として刊行された。また、ヴェ

ントゥーリはこの折の日本旅行の印象について、一〇月一〇日付けで、パリ亡命時以来の反ファシズム運動の友人で歴史家のレオ・ヴァリアーニに手紙を書いている。日本についての好印象を述べたあと、こう記している。「日本人のこの明敏とエネルギーは、彼らがキリスト教徒ではないという事実によるのではないかと思えてくる。今回の旅行の最大の喜びの一つは、非キリスト教の国にいることだ。ここにはカトリック道徳のうっとうしさ、煩わしさが無い。今日は古代ギリシアにおけるような、体育の祝日だ。彼らに幸多かれ。」⁽⁹⁾ヴェントゥーリの徹底した啓蒙理性の姿勢と同時に、戦後イタリアでキリスト教民主党と共産党に二分された政治文化の狭間での *laico* (非カトリック市民) の位置という問題を感じさせる一文である。

註

(1) 『イタリア史学雑誌』の歴史および編集長としてのヴェントゥーリに「*Giuseppe Ricuperati, La «Rivista Storica Italiana» e la direzione di Franco Venturi: un insegnamento cosmopolitico, in Il coraggio della ragione, Franco Venturi intellettuale e storico cosmopolita, a cura di Luciano Guerri e Giuseppe Ricuperati, Torino, 1998, pp. 243-308*

(2) Federico Chabod, *Croce storico*, in *Rivista Storica Italiana*, 1952, fasc. 4, pp. 473-530

(3) Id., *Storia della politica estera italiana dal 1870 al 1896*, Bari, 1951; Id., *L'Italia contemporanea (1918-1948)*, Torino, 1961. ヴェントゥーリ史学史におけるシャボアの位置に「*Francesco Chabod e la «nuova storia» grafica italiana dal primo al secondo dopoguerra (1919-1950)*, a cura di Brunello Vigezzi, Milano, 1984. なお『イタリア史学雑誌』一九六〇年四号がシャボア追悼特集を組んでいる。

- (4) 『正義と自由』誌への寄稿論文およびレジスタンス期の政治論文について Franco Venturi, *La lotta per la libertà: Scritti politici*, Torino, 1996
- (5) 行動党について多くの証言・研究があるが、基本的なものとして Giovanni De Luna, *Storia del Partito d'Azione: La rivoluzione democratica (1942-1947)*, Milano, 1982; Leo Valiani, *Il partito d'azione*, in AA.VV., *Azionisti Cattolici Comunisti nella Resistenza*, Milano, 1971, pp.11-148
- (6) Norberto Bobbio-Gian Enrico Rusconi, *Lettere sull'azionismo*, in *Il Mulino*, N.342, 1992, pp.1021-39; Vittorio Foa, *Il Cavallo e la Torre: Riflessioni su una vita*, Torino, 1991; Alessandro Galante Garrone, *Il mite giacobino*, Roma, 1994
- (7) ベンントーリの論文・著作一覧を Paola Bianchi e Leonardo Casalino, *Bibliografia degli scritti di Franco Venturi*, in *Il coraggio della ragione cit.*, pp.442-478
- (8) Luciano Guerci, *Gli studi venturiani sull'Italia del '700*, in *Il coraggio della ragione cit.*, pp.203-241; G. Ricuperati, *The historiographical legacy of Franco Venturi*, in *Journal of Modern Italian Studies*, 1997 N.1, pp. 67-88 なお『イタリア史学雑誌』一九九六年一二三合併号がウェントゥーリ追悼特集を組んでいる。
- (9) Leo Valiani - Franco Venturi, *Lettere 1943-1979*, Firenze, 1999, pp. 360-1

【二】『歴史研究』誌とグラムシ的歴史観

一九五九年末に『歴史研究』*Studi Storici* が創刊された。編集長はガエターノ・マナコルダで、出版元はグラムシ研究所である。マナコルダは一九世紀末イタリア史の研究者で、ブオナッローティ『パプー

アの平等のための陰謀』のイタリア語訳(一九四六年)や『諸会議を通して見たイタリア労働運動・起源から社会党形成まで(一八五三—一九二〇)』(一九五三年)などの著書があり、イタリア共産党に近い理論総合誌『社会』*Società* の編集長を経験していた^①。

『歴史研究』は二つの性格をもって創刊された。一つは、伝統的なアカデミズムの歴史学とは違った、マルクス主義に立つ歴史研究誌という性格である。もう一つは、共産党の文化政策に従属しない、自立した学術雑誌という性格である。

戦後イタリアの思想界における最大の出来事は、グラムシの『獄中ノート』の公刊であったといえる。『獄中ノート』の公刊は、イタリア思想界に占めていたクロッチェの座への挑戦を意味していた。ファシズム以前からファシズム時代を通じて二〇世紀前半のほぼ半世紀間、クロッチェはみずから編み出した精神の学としての哲学体系によって大きな役割を演じてきた。とくにファシズム時代に、自由の理念を唱えてファシズムを批判し、体制下の知識人の希望の灯火となり、また青年たちへの導きの星となった。しかし他方で、精神の学に発するクロッチェに特有のファシズム観に批判を抱く者も少なくなかった。ファシズムからファシズム崩壊の過程での、イタリア知識人たちのクロッチェ思想の受容あるいはそれからの離脱の問題は、この国の文化動向の核心部分であった^②。

ファシズム後のイタリアの新しい出発に当たって、イタリア共産党は思想界におけるクロッチェのヘゲモニーを切り崩し、それに取って代わるものとして、ファシズムの弾圧を受けて死亡したグラムシの

『獄中ノート』を前面に押し出した。『獄中ノート』の個々の記述は断片的であるが、そこには系統的なクローチェ批判が展開されていた。

こうして思想界の諸領域でのグラムシ思想とクローチェ思想の対抗が始まるが、歴史研究の分野でもグラムシのノートに触発された新たな動向が生じることになる。問題はグラムシに触発された歴史研究とは何かということだが、グラムシをどう読むかも含めて、五〇年代に歴史研究者の間での論争が続いた。しかし、この論争には共産党の文化政策が絡んでいて、歴史研究外の要因が混じっており、そうしたものから自立した研究雑誌の必要が求められていた。クローチェとグラムシをめぐる諸問題については第二部で改めて立ち戻ることにするが、『歴史研究』は以上のような背景のもとに創刊された。³⁾

一九五九—六〇年度の創刊の年に五号発行された以外は年四回の季刊雑誌で、表紙は第一号から現在まで一貫して薄い黄土色の単色のままである。私がイタリア史研究を始めた年の創刊という因縁もあって、この雑誌は毎号目を通してきたが、最初の数年は研究の良き手引きの役割を果たしてくれた。例えば創刊年の第三号は、「イタリア統一の諸問題」というテーマでグラムシ研究所が主催した研究集会の報告を特集して、ジョルジョ・カンデローロ「統一国家の生成」、エルネスト・ラジョニエーリ「統一国家の政治と行政」、エミール・セレーニ「イタリア統一における全国市場と資本蓄積」などの論文が掲載され、リソルジメント研究に手を初めたばかりの私にとって有益な内容であった。また六一年には三—四合併号で産業革命を特集したが、イタリアではこの時期まで歴史と経済史は異なった学問領域であり、産

業革命を歴史研究の対象とすること自体が画期的なことだった。

初めはマナコルダの単独編集の形を取ったが、まもなく編集協力をしていたジュリアーノ・プロカッチ（労働運動史・フランス近世史）、エルネスト・ラジョニエーリ（イタリア近代史・コミンテルン史）、ロザリオ・ヴィッラリ（南部社会史）、レナート・ツァンゲーリ（農業史）を加えた編集委員会が設置された。やや年長のマナコルダ（一九一六—）を除けば、四人とも一九二〇年代半ば生まれの気鋭のマルクス主義歴史家であった。先のような創刊をめぐる背景を受けて、学術雑誌としての質を保ちながら、グラムシに触発されたイタリア史の解釈を打ち出す試みは、イタリアの歴史学に新風を吹き込んだ。近現代史の論文が圧倒的に多かったが、古代史・中世史の論文も掲載し、また外国の歴史研究の動向にも誌面をさいて、学術的な歴史研究誌としての評価を早い段階に確立した。七〇年代以降、次々と創刊される歴史雑誌のバイオニアとして、『歴史研究』はイタリア史学史の中できわめて重要な役割を果たしたと言うことができる。

伝統的な自由主義史観は、主として指導階級の歴史を扱いながら、リソルジメントとそこから生まれた自由主義国家に肯定的な評価を下し、ファシズムについては自由主義国家でなしに第一次大戦後の状況に原因があると解釈していた。これに対して『歴史研究』の諸論文は、指導階級だけでなく従属階層に対象の視野を広げ、リソルジメントから自由主義国家に至る歴史過程において民衆の参加が排除されていたことを重視すると共に、ファシズムの起源をイタリア近代史の流れそのものの中に見ようとした。イタリア近代史に関する解釈の違いはっ

きりしていたが、『歴史研究』が依って立つ歴史認識は、クロウチェの観念論的歴史主義に対して唯物論的歴史主義といえるもので、従属階層に対象を広げはしたものの、思想、制度、組織の分析を中心とする政治史的傾向が濃厚であった⁴⁾。

イタリア歴史学に新風を吹き込んだこの雑誌の役割は重要であったが、しかし七〇年代以降に国際的に広まる歴史研究の新たな動向に対して、その総合誌的な性格と方法上の制約がいわば足かせとなって、必ずしも十分に対応することにはならなかった。一九八三年にフランチェスコ・バルバガッロが編集長となり、編集委員会のメンバーが一新された以後も、雑誌の基本的性格は維持され、大きな変化は生じていない。もちろん個々の論文や時折の特集には刺激に富んだ内容があり、さまざまな問題提起も行って、主要な研究誌の一つであることに変わりないが、グラムシ研究所の公式雑誌として早くに定着してしまっただけでなく、⁵⁾ 一九七〇年前後に、『歴史研究』のかたわらに次々と新しい歴史雑誌が生まれてくる。

註

- (1) マナコルダが研究者としての自らの歩みを語ったものにGastone Manacorda, *Bilancio di uno storico, in Il movimento reale e la coscienza in quiete*, Milano, 1992, pp. 255-73 また彼の著書・論文一覧は *Bibliografia degli scritti di Gastone Manacorda*, in *ivi*, pp. 349-71 マナコルダは一九六五年から七十六年までシチリアのカターニア大学に勤め、その後ローマ大学に移った。カターニア大学で〈現代イタリア史シチリア研究所〉を創設し、第二部で取り上げることになるが、シチリア史・南イタリア史に関する伝統史観を批判して新たな研究動向を作り出すようになるジュ

ゼッペ・マローネやサルヴァトーレ・ルーガらの研究者がそこから育った。Giuseppe Barone - Salvatore Lupo - Rosario Mangiameli, *Manacorda a Catania*, in *ivi*, pp. 329-41

- (2) Gabriele Turi, *Intelletuali e istituzioni culturali nell'Italia in guerra 1940-1943*, in *Annali della Fondazione Luigi Micheletti*, 5, Brescia, 1990-91, p. 806

- (3) 雑誌創刊をめぐるマナコルダ自身の証言について Gastone Manacorda, *Nascita di una rivista di tendenza*, in *Il movimento reale cit.*, pp. 293-97 他は Albertina Vittoria, *Togliatti e gli intelletuali: Storia dell'Istituto Gramsci negli anni Cinquanta e Sessanta*, Roma, 1992, pp. 129-39

- (4) 八三年に『歴史研究』編集長となったバルバガッロによる戦後史学史についての同誌の位置づけについて Francesco Barbagallo, *Politica, ideologia, scienze sociali nella storiografia dell'Italia repubblicana*, in *Studi Storici*, 1985 N. 4, pp. 827-840

- (5) 『歴史研究』誌二十五周年に際して書かれた二論文を参照 Albertina Vittoria - Giovanni Bruno, *Nota introduttiva*, in *Studi Storici: Indice 1959-1984*, 1985, pp. XI-XLII; Stuart J. Woolf, *Venticinque anni di <Studi Storici>*, in *Passato e Presente*, N. 14-15, 1987, pp. 225-230

【三】現代史研究の四雑誌

まず新雑誌を創刊の年代順に列挙しておく。

『マルケ歴史ノート』 *Quaderni Storici delle Marche* 一九六六年創刊。一九七〇年から『歴史ノート』 *Quaderni Storici* と改題、年三回刊。

『現代史』Storia Contemporanea 一九七〇年創刊、隔月刊。

『現代史雑誌』Rivista di Storia Contemporanea 一九七二年創刊、季刊。

『現代イタリア』Italia Contemporanea 一九七四年に『イタリア解放運動』Il movimento di liberazione in Italia (一九四九年創刊)を改題、季刊。

『社会と歴史』Società e Storia 一九七八年創刊、年三回刊。

『労働・社会主義運動』Movimento Operaio e Socialista 一九七八年から同名誌の新シリーズ、年三回刊。

『過去と現在』Passato e Presente 一九八二年創刊、年三回刊。

『メリディアーナ』Meridiana 一九八七年創刊、年三回刊。

『記憶と探究』Memoria e Ricerca 一九九三年創刊、年二回刊。

これらの歴史研究誌の創刊は、多かれ少なかれ、経済の奇蹟と呼ばれる経済成長を経過し、政治的には中道左派政権の誕生を迎えた一九六〇年代のイタリア社会の変化を目の当たりにしての、新たな社会認識による歴史研究の取り組みを示しており、また幾つかは一九六八―六九年の学生・労働者の闘争、それに続く新左翼運動の高揚とネオ・ファシズムの台頭という社会状況を背にして、現代という時代の歴史研究の重要性の意識を表していた。ここにあげた九つの雑誌のうち『現代史』、『現代史雑誌』、『現代イタリア』、『記憶と探究』は現代史の専門誌、他の五つは社会史的傾向をもった研究誌といえるが、現代史専門誌の中にも社会史的関心を強く示しているものがある。二つに分けるのは便宜的な措置だが、この節ではまず現代史の四雑誌の特徴を述べておく。

ほぼ同時期に創刊された『現代史』と『現代史雑誌』はあらゆる面で対照的だった。前者はファシズム研究の専門家でローマ大学教授のレンツォ・デ・フェリーチェ(一九二九―一九九六)が編集長だが、創刊の辞なしに刊行が始まった。つまりどのような歴史認識で現代史研究を行うのか、そのための方法はどうあったらいいのかに触れることなしに始められ、このことは以後の編集にも影を落とした。ファシズムや第二次大戦の研究論文に多くの誌面が当てられたが、研究の方法や解釈をめぐる議論あるいは研究動向の紹介はほとんどなかった。例えば、デ・フェリーチェ自身のムッソリーニ伝(全四巻八分冊)が公刊されるたびに、『歴史研究』や『現代イタリア』などは、その史料の扱いや解釈に関して厳しい批判を加える論者を掲載したが、『現代史』はそれらの批判にこたえて議論を展開することはせず、他誌との対話をかたくなに拒絶した。この雑誌は歴史理解の政治性を排して、実証的で客観的であることを主張したのだが、その実証性と客観性はしばしば、過去の出来事を追認するわなに陥っているようにみえる。『現代史』はデ・フェリーチェの没した一九九六年に終刊となった。

『現代史雑誌』の前に『現代イタリア』誌について説明しておくが、これは『イタリア解放運動史全国研究所』の研究誌で、『イタリア解放運動』の題名で一九四九年に創刊され、七四年(通算一一四号)から『現代イタリア』に改名されたものである。七八年にボローニャ大学教授のマッシモ・レニャーニ(一九三三―一九八)が編集長となるが、

彼は六一年から編集業務に携わっており、次に述べるクアッツァと並んで第二次大戦史とレジスタンス史研究の中心的な推進者で、雑誌編集と共に多くの研究会議の企画者・報告者として貢献した。³⁾ 雑誌は、一九九九年で通算二一七号に達したが、現代史全般の中にレジスタンスを意味づけるというきわめて明確な意図をもち、個別論文はもとより、ファシズム、反ファシズム、レジスタンスをテーマにしたセミナーや共同研究の成果を掲載して、高い質の研究水準を維持している。とくにファシズムに関してここに掲載される論考には刺激的なものがあがり、さらには個別テーマをめぐる討論や研究動向の紹介、それに辛口の書評など編集内容の充実した研究誌で、イタリア現代史研究にとって不可欠の雑誌といえよう。

《イタリア解放運動史全国研究所》は『現代イタリア』誌の他、『イタリア解放運動史叢書』を刊行しており、また全国レベルのこの研究所と提携した形で《イタリア解放運動史研究所》あるいは《レジスタンス史研究所》が州レベル、県レベルで組織されていて、都合五八機関に達し、その多くが独自の定期刊行誌を有して、研究論文や資料・記録を発表している。⁴⁾

さて『現代史雑誌』についてだが、この雑誌は六八―六九年闘争と新左翼の登場という社会状況を経験し、それを歴史研究の場で受けとめようとした歴史家たちによって始められたといえるだろう。編集長でトリノ大学教授のグイド・クアッツァ(一九二―一九六)を始め、トリノ在住の研究者が中心となった雑誌であり、またクアッツァ本人が《イタリア解放運動史全国研究所》の会長でもあったことから、

『現代イタリア』誌との交流が活発であった。クアッツァはレジスタンス史研究の第一人者で、従来のレジスタンス研究が反ファシズム諸政党およびこれら諸政党からなる国民解放委員会を主体として語ってきたのに対して、政治的・イデオロギー的動機からのレジスタンスへの参加と並んで、日常の生存的選択としてレジスタンスに参加した人たちが多くいることに注目し、この人々の選択の契機を重視する新たな見解を打ち出した。また、レジスタンスが社会の根底からの改革を目指した闘争であったにもかかわらず、戦後イタリアのさまざまな分野でファシズム期の制度や慣行が継承され、ファシズム体制から戦後共和制への移行において連続性が見られることに注意を喚起した。⁵⁾

『現代史雑誌』には、とくに最初の頃は、『歴史研究』との視点の違いを意識した面があり、例えば労働運動や社会主義運動の研究において、組合や政党など組織や指導者レベルの分析でなく、運動の担い手の自律性や自発性を重視した「下から」の視点の強調を特徴とした。グラムシに関する研究も盛んに取り上げ、グラムシの読み直しの試みが続けたのも特徴である。この雑誌は、その後次第に一九世紀にも対象を広げて、社会史の研究動向に誌面を提供することも多くなり、国際的に注目を集めたカルロ・ギンズブルグの論文「徴候…推論的パラダイムの根源」の第一稿である「徴候…科学的パラダイムの根源」(七八年一号、副題の違いに注意)を掲載し、またジュリアーナ・ジェメリー・マリア・マラテスタ「フランス現代歴史学におけるソシアビリティと歴史」(八〇年四号)といった論考を発表した。良質の研究誌であったが、クアッツァの死去と前後して、一九九四―九五年度で終

刊となった。⁽⁶⁾

イタリアの歴史雑誌には、地方史・郷土史研究とは別に、在住地域を同じくする研究者グループが中心となって刊行している場合がよくみられるが、比較的最近に創刊された『記憶と探究』誌もそうしたケースの一つである。これはロマーニャ地方在住の研究者による現代史研究誌で、ソシアビリテとアソシアシオンの議論を導入して一九世紀イタリアの政治過程の分析を試みているマウリツィオ・リドルフィ（一九五七—）が編集コーディネーターを担当している。⁽⁷⁾誌面にもそのような問題関心が反映されて、「ロマーニャ地方におけるファシズム」などの特集と並んで、「近代化のネットワーク」とか「祭りの変容」といった特集を組んでいる。創刊からまだあまり時間がたっていないが、現代史の普遍的テーマとロマーニャの地域史研究を組み合わせた独自の編集方針が注目される雑誌である。

註

- (1) 両誌を比較して論じたものに Marco Palla, *Due poli del dibattito e della ricerca: <Storia Contemporanea> e <Rivista di Storia Contemporanea>*, in *Movimento Operaio e Socialista*, 1987 N.1-2, pp.63-76
- (2) デ・フェリーチェの研究協力者であったエミリオ・ジェンティーレによる追悼論文がある。Emilio Gentile, Renzo De Felice: *A Tribute*, in *Journal of Contemporary History*, 1997 N.2, pp.139-51
- デ・フェリーチェのファシズム論とそれをめぐる論争に関しては、第二部の個別テーマの検討の際に取り上げる予定である。
- (3) 『現代イタリア』二二三号（一九九八）がレニャーニ Massimo Legnani を追悼して、彼の主要論文九点を掲載している。
- (4) 全国レベル、地方レベルのこれら研究所の活動について *Resistenza e*

storia d'Italia. Quarant'anni di vita dell'Istituto nazionale e degli istituti associati. Annuario 1949-1989, a cura di Gaetano Grassi, Milano, 1993

- (5) クアッツァにはレジスタンス史研究の多数の論文があるが、主著として Guido Quazza, *Resistenza e storia d'Italia: Problemi e ipotesi di ricerca*, Milano, 1976

- (6) 『現代イタリア』二〇八号（一九九七）がクアッツァ追悼特集を組んでいる。

- (7) リドルフィの主要著書に Maurizio Ridolfi, *Il circolo virtuoso. Socialità democratica, associazionismo e rappresentanza politica nell'Ottocento*, Firenze, 1990; Id., *Il PSI e la nascita del partito di massa: 1892-1922*, Bari, 1992; Id., *Interessi e passioni. Storia dei partiti politici italiani tra l'Europa e il Mediterraneo*, Milano, 1999

〔四〕社会史研究の五つの道（一）

前節で取り上げた現代史関係の四誌の中にも、多かれ少なかれ社会的関心はあるのだが、残り五誌について一言でいえば、イタリアにおける社会史研究の五つの道を表しているということになる。

戦後イタリアの自由主義史学はクローチェの倫理・政治史の大枠の中にあった。それに対置されたグラムシも、六〇年代まではイタリア歴史学に伝統的な歴史主義の枠組みの中で理解され、どちらにしても歴史主義的な社会認識の方法が支配的であった。ここでの歴史主義的認識とは、歴史は進歩と発展の経過を表しており、歴史を知ることということは、そこに作用している人間の精神と行為を理解することであり、そして歴史を知り、歴史的な理解を持つことこそ現代を理解する

最良の方法である、という考えを意味している。イタリアにおける歴史研究がクロチエ史学からグラムシの歴史観へ移行した状況があったにしても、実際には両者とも歴史主義的な認識と方法において共通しており、その違いは前者が指導階級、後者が従属階層を主たるテーマにしたという、取り上げる対象の問題であって、認識上の根本的な変化が生じていたのではなかった。イタリアでは、このクロチエ・グラムシ的な歴史主義から身を解き放つ課題が、社会史研究への関心と結びついたといえるのである。¹⁾

イタリアでの社会史研究はこうした事情を背景に、人間の精神と行為を倫理・政治的方法でなしに、社会構造、経済関係、文化環境などに関連させ、そうしたコンテクストを含めた社会史として考察することの必要と、そのためには社会諸科学の方法を導入することが重要だとする議論から出発した。一九七〇年前後、社会史研究はイタリアのみならず、他の諸国の歴史研究においても議論が進められたところで、イタリアの歴史学固有の課題に国際的な研究動向が重なって、社会史への関心は急速に強まった。

これらのことに最も早く自覚的に取り組み、また『歴史研究』への対抗意識も絡んで、新雑誌の刊行に及んだのが『歴史ノート』誌(一九六六年創刊)である。この雑誌は、マルケ地方のアンコーナ大学の研究環境のもとで生まれたので、『マルケ歴史ノート』の誌名で始まったが、すぐに全国誌の性格を帯びてマルケの地名が除かれた。『歴史ノート』誌は創刊号にブローデルの「長期持続—歴史と社会科学—」(五八年)、また二二号(七三年)にホブズボームの「社会史から社会

の歴史へ」(七一年)など国際的に話題になった論文を掲載して、社会史をめぐる議論を積極的に展開した。この雑誌は、諸研究誌の中でいちばん方法的議論に力を注いでおり、編集部内では、社会史とは何なのか、それは全体的概念なのか、それとも個別領域なのか、あるいは学際的研究なのか、といった根本的議論が続けられた。現在までに編集委員会の構成に何度か入れ替えがあるが、創刊の経緯から編集委員会内部の議論にわたる諸問題について、創刊メンバーであり、一貫して編集責任のポストにあるローマ大学教授アルベルト・カラッチョロ(一九二六—)が、一〇〇号記念に寄せた文章で解説している。²⁾

誌面の編集は、七〇年代初めから毎号テーマ別特集の形式をとり、通算一〇五号(二〇〇〇年末)に達した最新号まで、およそ八〇に及ぶテーマが彩りのある背表紙に並んでいる。各号のテーマの紹介は不可能だが、幾つかの例をあげれば、「定住移住の考古学と地理学」(二四号)、「穀物、価格、市場」(二八号)、「生者と死者」(五〇号)、「災難、恐怖、対応」(五五号)、「地域紛争と政治的イデオロム」(六三号)、「犯罪資料と社会史」(六六号)、「一九世紀イタリアのエリートとアソシアション」(七七号)、「財産管理と女性の権利」(九八号)等々である。

この雑誌の社会史とは何かをめぐる絶えざる議論の中から、七〇年代後半にミクロストーリー(微視の歴史学)の提唱がなされた。ミクロストーリーの中心的な提唱者は、編集委員のエドアルド・グレンディとジョヴァンニ・レーヴィで、その最初の具体的な表明がグレンディの論文「ミクロ分析と社会史」(三五号、七七年)だった。この直後

に、カルロ・ギンズブルグが編集委員に加わり、その後まもなくギンズブルグとレーヴィの肝いりでエイナウディ出版社から「ミクロストーリーエ叢書」の刊行が始まって、ミクロストーリーアへの注目が集まり、各所での論議が盛んとなる。『歴史ノート』誌が発信元であり、それにこの雑誌のテーマ別特集の形式自体が歴史のミクロ分析的傾向と見なされたこともあって、『歴史ノート』をミクロストーリーアの研究誌と特徴づける風評が広まるが、カラッチョロやレーヴィが証言するように、編集委員会が一致してミクロストーリーアを支持していたわけでも、またそうした編集方針を打ち出したのでもなかった。⁽³⁾

編集委員会での見解が分かれたのみならず、ミクロストーリーアの推進者の間でも、これは社会史の一分野であるのか、あるいは社会史を越える歴史の方法であるのかをめぐる理解はさまざまであった。またアルベルト・バンティのように、ミクロストーリーアはもともととは、個々の行為主体が追究する諸戦略の織りなす社会諸関係の研究を課題としていたのが、ギンズブルグによって諸個人の行為の細部に文化的意味を見出す方法に転換され、一般にはミクロストーリーアといえれば後者の意味で理解されるようになったとして、「社会諸関係」派と「文化主義」派に分類する見方もでてきた。⁽⁴⁾ さらには、主唱者の一人であるレーヴィは、この二つともややニュアンスを異にして、社会的諸規範の戦略的利用ということを重視し、社会の規範的秩序の間隙を縫って集団や個人が日常生活の戦略を編み出すことを説明しようとした。⁽⁵⁾ ミクロストーリーアをめぐるのは、フランスのロジェ・シャルチエやジャック・ルヴェルが積極的に論じたりして、国際的な流れを生み出

した感があるが、『歴史ノート』誌上では必ずしも活発に論議されたわけではない。同誌がまとめてこれを取り上げたのは、レーヴィがすでに編集委員会を去ったあとの八六号（九四年）においてで、この号のテーマ特集は「親族の構築」だったが、特集とは別のディスカッション欄に、ギンズブルグ「ミクロストーリーア…私の知っている二、三のこと」、グレンディ「ミクロストーリーア再考」、ルヴェル「ミクロ分析と社会の構築」の三論文が掲載された。⁽⁶⁾

さて『歴史ノート』は、イタリア歴史学が、クロッチェリグラムの歴史主義から社会史的認識に移行するに当たってきわめて重要な役割を果たしたのだが、七〇年代後半に、この研究誌が示すミクロ分析的傾向に異論を唱える形で、他の社会史研究誌が生まれてくる。

註

- (1) クロッチェリグラムの歴史主義から社会史への転換の問題ならびにイタリアの社会史研究の特徴をめぐって、八〇年代に、『歴史ノート』編集責任者のカラッチョロの発言をはじめ、『労働・社会主義運動』の特集号「現代史の現在」（八七年）、ジョルジョ・カンデローロ八〇才記念研究集会（八九年）などで鋭い議論が展開された。Alberto Carciolo, *Between Tradition and Innovation: Italian Studies in Modern Social History*, in *Social Research*, 1980 Autumn, pp. 404-25; Id., *Innovazione e stagnazione nella storia sociale durante gli ultimi decenni in Italia*, in *Il Mulino*, 1986 N. 4, pp. 602-16; Nicola Gallerano, *Fine del caso italiano? La storia politica tra <politicità> e <scienza>*, in *Movimento Operaio e Socialista*, 1987 N. 1-2, pp. 5-25; Alberto M. Banti, *La storia sociale: Un paradigma irrinviabile*, in *La storiografia dell'Italia contemporanea: Atti del convegno in onore di Giorgio Candeloro*, Pisa, 1991, pp. 183-208. #

た第二節註(4)であげた論文で『歴史研究』編集長バルバガッロは、イタリア文化の伝統の中に、各国の多様な文化運動を吸収して「イタリアの優位性」を保持しようとする折衷主義戦略があると論じ、七〇年代にグラムシ的歴史主義とアナール派の問題観との融合があったことを指摘する。Francesco Barbagallo, *Politica, ideologia, scienze sociali nella storiografia dell'Italia repubblicana*, in *Studi Storici*, 1985 N.4, pp. 827-40. バルバガッロについては次の論文集も参照。Id., *L'azione parallela: Storia e politica nell'Italia contemporanea*, Napoli, 1990. なお七〇年代イタリアでグラムシの歴史論をめぐる批判的検討が課題となった時期に、イタリアの外ではヘゲモニー論の思想家グラムシの「発見」を通して、歴史研究にグラムシのヘゲモニー論を取り入れる動きが出た。

(3) A. Caracciolo, *La prima generazione*, in *Quaderni Storici*, N.100, 1999, pp. 13-29. なおカラッチョロについては次のインタビューを参照。Dal marxismo all'ecostoria: Intervista ad Alberto Caracciolo, in *Meridiana*, N. 9, 1990, pp. 205-22. また『歴史ノート』九一号(一九九六年)の「カラッチョロ追記念号」における次の文も参照。Sergio Anselmi - Renzo Paci - Ercole Sori, *Il contributo di Alberto Caracciolo alla storiografia regionale delle Marche*, in *Quaderni Storici*, N. 91, 1996, pp. 5-9.

(3c) Il piccolo, il grande e il piccolo: Intervista a Giovanni Levi, in *Meridiana*, N.10, 1990, pp. 228-29; A. Caracciolo, *La prima generazione cit.* pp. 24-25.

(4) A.M. Banti, *La storia sociale cit.*

(5) ノーヴァーについては註(3c)のインタビューの他、以下を参照。Giovanni Levi, *L'eredità immateriale: Carriera di un esorcista nel Piemonte del Seicento*, Torino, 1985; Id., *On Microhistory*, in Peter Burke ed., *New Perspectives on Historical Writing*, Polity Press, 1991, pp. 93-113. (谷口健治訳「ミクロストリア」) ピーター・バーク編『ニュー・ヒストリーの現在: 歴史叙述の新しい展望』人文書院、一九九六、一〇七—一二三(頁)。

(6) ギンズブルグの論文は一九九二年に来日した折の講演(竹山博英訳「ミクロストリアとはなにか—私の知っている二、三のこと—」、『思想』八二六号、一九九三、四—三〇頁)と同じ内容である。なおルヴェルについては彼の編集になる次の書を参照。Jacques Revel ed., *Jeu d'échelles: La micro-analyse à l'expérience*, Paris, 1996.

〔五〕社会史研究の五つの道 (二)

歴史のミクロ分析を批判して、七八年に創刊されたのが『社会と歴史』である。『社会と歴史』は、倫理・政治史のクロウチエ史学とイタリアの特殊な型のマルクス主義史学(グラムシ的歴史主義)の双方を克服する課題を掲げる点で『歴史ノート』と共通していたが、後者による課題の追究がミクロ分析的な傾向に陥っていることに批判を示し、歴史のマクロな観察を唱えて誕生した。「創刊の言葉」でこのことを明快に表明し、この雑誌の課題は、中世から現代に至るまでのイタリア社会の諸起源と形成過程をグローバルに考察することであると宣言している。そしてまた、「社会史」というより「社会の歴史」が目標であって、そこではマルクスが言うところの「資本主義的生産諸関係」の出現と支配が重要なテーマになるだろうと述べている⁽¹⁾。

この「創刊の言葉」から理解できるように、『社会と歴史』は生産関係、所有形態、企業経営、経済制度など広い意味での社会構造に関心を注いで、グラムシ的マルクス主義でなしに、マルクスに立ち戻ってのマルクス主義を参照枠に設けようとした。日本のマルクス主義の立場からすれば、こうした基礎理論がこの時期になってなぜという疑

問が発せられるだろうが、戦後イタリアにおけるマルクス主義の受容がクロロチェからグラムシへの系譜でなされたことを考えると、マルクスに戻ってのマルクス主義の導入は早晩起こるべくして起こった問題といえよう。この雑誌は二〇〇〇年で通算八八号に達している。

『社会と歴史』の創刊と同じ年に、五〇年代から刊行されていた『労働・社会主義運動』が新シリーズに衣替えて登場した。新装第一号（一九七八年——二合併号）は、「エドワード・トムスンにインタビュー…労働運動の社会史をめぐる討論のために」と題して、七六年に『ラディカル・ヒストリ・リビュー』に掲載されたトムスンのインタビューを転載した。⁽²⁾ このインタビューを転載する理由を述べた紹介文で、トムスンの研究がイタリアでほとんど注目されない状況自体がイタリア歴史学の現状を物語っていると指摘して、この雑誌が『歴史ノート』とも『社会と歴史』とも違う内容の社会史を目指していることを明らかにした。

『労働・社会主義運動』誌が取り上げた特集テーマは労働者文化、移民の世界、周縁と逸脱、犯罪と狂気、裁きの諸相、出征兵士、居酒屋のプロレタリアート、ファシズムの言語とファシズムの言語政策など多様であるが、それらを通じての一貫した関心は民衆の日常生活とその文化にあることがみてとれる。労働運動・社会主義運動を取り上げる場合でも、階級闘争や組合・政党組織といった伝統的なテーマよりは、労働の場、生活の場における人々の結びつきのありようを解明することに関心が向けられていた。この雑誌は、日常性の社会史にいちばん近い性格を有しているといえるが、九一年からは『二〇世紀』

と誌名を改め、労働・社会主義運動という限定をはずして、より広いテーマで誌面を編集する方針に移った。

八二年に新雑誌『過去と現在』が生まれた。編集長のフィレンツェ大学教授ガブリエレ・トゥーリをはじめフィレンツェの研究者グループが中心だが、この雑誌の編集メンバーには『歴史研究』の協力者が多い。創刊号の巻頭言は、この雑誌が概してマルクス主義的傾向の研究者、とりわけグラムシに触発された研究者のイニシヤティブによっていると述べており、新雑誌の発行は、グラムシ研究所の機関誌としての『歴史研究』の編集がいささか定型化していることに対して、六〇年代以降の歴史研究のさまざまな動向に開かれた誌面作りをするこゝとで研究の活性化を図ろうとするものであった。従って『過去と現在』の性格は、社会史研究を志向する研究誌ということではないけれども、勢い社会史研究の諸動向をテーマとして取り上げる傾向をもった。⁽³⁾

この雑誌の特徴は、毎号巻頭にデイスカッションとして、歴史研究の重要な学術書やテーマをめぐって三、四人の研究者が討論するページを置いていることで、デ・フェーリチェ『ムッソリーニ…全体主義国家』（創刊号）、ヴェントゥーリ『一八世紀啓蒙改革者』（八号）、ホプスボーム『極端の時代…短い二〇世紀』（三七号）などの話題を呼んだ書物から、「六八年…困難な歴史」（一九号）、「問われるリソルジメント」（四一号）、「ライフ・イズ・ビューティフル？ロベルト・ベニーニとアウシュビッツ」（四八号）といった広範囲にわたるテーマを対象に議論を展開している。さらにその他、誌面には同時代の歴史家を論ずる「現代の歴史家」の欄が設けられ、例えばアルベール・ソ

ブル(四号)、エドワード・トムソン(五号)、エルネスト・ラジョニエーリ(八号)、フェルナン・ブローデル(一二号)、ティム・メーソン(二七号)、グイド・クアツァ(四一号)らの仕事を紹介している。『過去と現在』誌には刺激的な個別研究論文の発表もあり、二〇〇〇年で通算五一号に達するが、有意の研究誌といえるだろう。

社会史への五つの道として最後に検討するのが、八七年創刊の『メリディアーナ』である。編集長はローマ大学教授ピエロ・ベヴィラツクア(一九四四―)で、「歴史と社会科学研究誌」の副題がついている。この雑誌の最大の特徴は、シチリア島とサルデーニャ島を含めた南イタリア社会の歴史と現状を説明するという明確な目的で創刊されたことである。

イタリアでは国家統一直後から、南部問題の存在が研究者や政治家によって議論され、南部主義の系譜を生み出した。この系譜は、南イタリアが遅れて停滞した社会であるという共通の認識から出発して、その原因をさまざまに分析し、それぞれの解決策を提示してきた。南部問題をめぐる議論は、第二部の個別テーマの研究史の場で扱うことになるが、『メリディアーナ』誌は、南部主義の系譜が共通の認識としていた南イタリア社会の遅れと停滞という前提そのものを問い直して、南部主義の言説が内なるオリエンタリズムであることを指摘し、南イタリアにおける社会と文化の固有のあり方の説明に取り組もうとするのである。

ベヴィラツクアは、以前の著書『ファシズムと戦後の時期の南部農村・カラブリアのケース』(一九八〇年)で、ファシズムは静態的

というより動態的であるとして、ファシズム体制下の三〇年代の南部社会に構造的な変容が生じていることを明らかにし、そのうえでファシズム期とファシズム以後という政治的事件による時期区分のみに目を奪われると、社会変容の実際の過程を見落とす恐れがあることに注意を促していた。^④しかしこのことは、政治の契機をなおざりにすることを意味しているのではない。むしろ、『メリディアーナ』は社会史の中に政治の契機を取り戻し、南イタリアの現実が国家の政策と密接にかかわっている事実を重視して、南部社会を国家と地域権力の政治回路・文化回路の中に置き、その関係のもとでの歴史と現状の分析を心がけようとするのである。^⑤こうした見地から、この雑誌は「政治の諸回路」(二号)、「地域諸権力」(四号)、「北部問題」(一六号)、「文化の諸回路」(二二―二三号)などの特集を組み、さらには「マフィア」(七―八号)、「反マフィア」(二五号)の特集によってマフィアに関する俗説を斥けつつ、新たなマフィア分析とマフィアとの闘いの姿勢を打ち出している。『メリディアーナ』誌は、現在最も活気に富んだ研究誌の一つであるといって良いだろう。

以上、第一部では諸種の歴史研究誌を通してイタリア歴史学のあり方を概観したが、第二部では別の角度からの考察によって、イタリアにおける近現代史研究の過去と現在を考えることにする。

註

- (1) Presentazione, in *Società e Storia*, N.1, 1978, pp.5-7
- (2) Un'intervista a E.P.Thompson : Per un dibattito sulla storia sociale del movimento operaio, in *Movimento Operaio e Socialista*, 1978 N.1, pp.77-100 のインタビューは日本語訳もある (近藤和彦訳「E・P・トムスン」, E・P・トムスン他『歴史家たち』名古屋大学出版会、一九九〇、五九—八一頁)
- (3) Editoriale, in *Passato e Presente*, N.1, 1982, pp.3-4 ; Franco Andreucci e Gabriele Turi, Indirizzi storiografici e organizzazione della ricerca, in *Ivi*, N.4, 1983, pp.3-10 エッセーリジヒヤタリニ近現代史に関する多くの論文があるが、主著として Gabriele Turi, *Il fascismo e il consenso degli intellettuali*, Torino, 1980 ; Id., *Giovanni Gentile : una biografia*, Firenze, 1995
- (4) Piero Bevilacqua, *Le campagne del Mezzogiorno tra fascismo e dopo-guerra : Il caso della Calabria*, Torino, 1980
- (5) Presentazione, in *Meridiana*, N.1, 1987, pp.9-15